

「といえば」と「といたら」

——使用頻度の差異とその要因——

大塚 貴史

キーワード：「といえば」、「といたら」、条件表現、コーパス

要 旨

本稿の目的は、「といえば」と「といたら」が有する用法ごとの使用頻度の差異、及びその要因の所在を明らかにすることにある。まず、コーパスから収集した実例を観察し、そこで用いられる「といえば」と「といたら」を、先行研究に倣って〈動詞句〉〈問答〉〈想起〉〈表現属性〉〈同語反復〉〈意味確認〉〈恒時条件〉〈感嘆〉の8つに分類する。その結果、この8つの用法、及びその下位分類に位置付けられる用法において、「といえば」と「といたら」の使用頻度に差が生じる様相を見る。次に、8つの用法の多くにおいて〈動詞句〉との意味的な関連がみとめられることを指摘する。最後に、条件表現「ば」と「たら」の特性を踏まえると、直接的には〈動詞句〉の「といえば」と「といたら」の使用頻度に関与するこの特性が、〈動詞句〉以外の用法における使用頻度の差異の要因とも考えられることを論じる。

1. はじめに

現代日本語には、引用の「と」に動詞「言う」の条件形が後接した「といえば」「といたら」という形態的に似通った2つの形式が存在する¹。これらは、その形態

¹ 本稿では、引用箇所を除き、「といたら／と言ったら」「っていたら／って言ったら」を「といたら」と、「といえば／と言えば」「っていえば／って言えば」を「といえば」と一括して表記する。

のみならず、意味的にも近似することが先行研究によって示されている。

- (1) 窓口で「郵便物が届かないそうなのですが、調べてもらえますか？」{と
言えは／と言ったら}、普通郵便でも一応調べてくれます。²

(Yahoo!知恵袋)

- (2) 犯人がなぜそんな手数のかかることをしたか{といえは／といたら}、殺人は大阪で演ぜられた、と思わせるためだったのでしょうか。

(横溝正史『蝶々殺人事件』)

- (3) 高松市{といえは／といたら}例の漆塗の茶箱や茶盆が思い出されます。

(柳宗悦『手仕事の日本』)

しかし、これらは次のような場合にはその使用に関して許容度の差が生じることから、その用法が完全な一致を見ないことも、既に指摘されているところである。

- (4) 走りきったあとの爽快感{といたら／?といえは}日常生活では味わえない
(2005 MTB 編『スポーツサイクルカタログ』)

しかし、「といえは」と「といたら」が有する用法の有無、さらに各用法における使用形式の頻度差に関する先行研究の指摘は、少数の用例を対象とした分析を基に行われたものであり、より多くの用例を意味的、あるいは統語的な観点から詳細に分析することで、従来言及されることのなかった細かな違いを指摘することができる余地を残している。また、2形式が有する用法や、各用法における使用形式の頻度差の要因について言及する先行研究は、管見の限り見当たらない。こうした点を踏まえ、本稿ではコーパスから収集した大量の実例を基に、2形式の用法、及び各用法において使用される形式に関する実態を調査し、その要因について考察する。

² 本稿が提示する例文において、「{○○/△△/□□}」のように「{ }」と「/」を用いて複数の表現を並べる場合、原文の表現は先頭の「○○」であり、それ以降の「△△」や「□□」は、「○○」との置換可能性を検討するために筆者が併記した表現であることを意味する。また、先行研究から引用した例文については、その引用元で「{ }」と「/」以外の記号を以って表現が併記されている場合、煩雑になることを避けるため、そのすべてを「{ }」と「/」に置換して引用する。さらに、例文（あるいは表現）にその許容度を示す記号（「?」「??」「*」）を付す場合、断りのないものはすべて筆者の判定によるものである。

2. 先行研究

「といえば」と「といたら」を個別に扱った研究は一定数確認できる。例えば、陳（2010）や佐藤（2012）、大塚（2016）などがこれにあたる。これらの研究では、主にその用法の分類や、提題機能の分析などを中心とした論述が行われている。一方、これら 2 形式を比較し、その用法の差異に触れた研究は、管見の限り、日本語記述文法研究会（2009）、小西（2011）、佐藤（2012）に限られる。以下、これら 3 つの研究による指摘を概観する。

2.1 日本語記述文法研究会（2009）

日本語記述文法研究会（2009）では、「は」以外に主題提示機能を果たし得る形式を広く取り上げ、それらの形式を形態的、意味的な観点からいくつかの「類」にまとめている。その中で、「といえば」は「という」と「といたら」と同じ「「といえば」類」に、「といたら」はその「「といえば」類」に加え、「ったら」「ってば」「ときたら」と同じ「「ったら」類」のひとつとしても数えられている。

まず、「「といえば」類」に属する形式は、「文脈に出てきたものを新たに主題として提示して①主題から連想されることを述べたり、②主題にあてはまる事物や人物を挙げたり、③主題の特徴や本来的な属性や聞き手の理解を助ける説明を経て、解説を行う文において用いられる（p.247、番号は筆者による）」）。このうち、①と③の場合は「といえば」「といたら」がいずれも使用可能とされる。しかし、このうちの②については「②-1 主題に当てはまる代表的な事物と話し手が考えるものを挙げる場合」「②-2 主題に当てはまる事物が少なく、かろうじて当てはまる事物を挙げる場合」「②-3 聞き手の発話中のことばを引用して提示し、その指示対象を確認したり尋ねたりする」場合（いずれも p.248、番号は筆者による）があり、このうち②-3 の場合は「といえば」のみ使用不可能であることが指摘されている。例えば、次のような場合がこれにあたる。

- (5) A 「田中さんが結婚するらしいよ」
B 「田中さん {っていうと / っていったら / ??っていえば}、あの営業部の切れ者？」
（日本語記述文法研究会 2009）

次に、「つたら」類に属する形式は、「人物や事柄を主題として感慨をこめて提示し、それに対する話し手の評価を述べるのに用いられる (p.241)」。多くの場合、その評価は「批判的なものや、マイナスの評価 (p.242)」であり、「文には話し手の嘆きや憤慨、あきれの気持ちなどが込められている (p.242)」が、これ以外にも、「人物や事柄がもつすごさや程度のはなはだしさ (p.242)」を表現するのに用いられることもあるとしている。また、意味的には後者と同様だが、後項に否定の述語が生起する慣用的表現もあるとされる (p.242)。この「つたら」類には「といえば」が含まれないため、次のような場合は「といえば」では不自然になると解釈される。

- (6) 近頃の若者 {ときたら／といたら／??といえば}、不便さに耐えるということを知らない。
- (7) 太平洋の魚の色彩の豊かさ {といたら／??といえば}、大西洋とは比べ物にならない。
- (8) その時の彼の喜びよう {といたら／??といえば} なかった。

(いずれも日本語記述文法研究会 2009)

2.2 小西いずみ (2011)

次に、「といえば」と「といたら」の用法を計量的に分析している小西 (2011) を見る。小西は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ)のモニター公開データ (2009 年度版)のうち、生産実態 (出版) SC の書籍のサンプルから「という」と「といえば」「といたら」の用例を収集し、これら 3 形式の用法を 8 つに分類する。各用法と、その前項と後項の関係性、及び各用法に対応する「といえば」と「といたら」の用例は次の通りである。

(9) 動詞句：発話・表現一帰結

- a. 「作風がよい」と言えば、中国人も日本人も喜ぶだろう。
- b. 「湖を見てろ」と言ったら、2時間も3時間も見続けてた

(10) 問答：問い—答え

この捻を何に使うか {というと／といえば／といたら}、筏を組む際

にロープ代わりとして使うのである。³

- (11) 想起：キーワード—想起対象事物
- a. 日本酒の醍醐味といえ、やはり爛酒である。
 - b. 当時は鶏といったら、みんな庭を駆け回っている地鶏ですからね。
- (12) 表現属性：言語表現—言語表現としての属性・評価
養女 {といえ／といったら} 聞こえはよいが、
- (13) 同語反復⁴
プライベート IP アドレス自体、もともと LAN の内部で使うために定義された IP アドレスなので、これは当然といえば当然です。
- (14) 意味確認：先行する発話やその一部—その表意・含意の確認
「角館の戸沢様の分家の門屋様と言ったら、角館から二里ほど北に行った檜木内川沿いの門屋にある、あの城でっか」
- (15) 恒時条件：条件となる事物—その恒時・即時的帰結
私でも、光さんでも同じだけど、よく働きましたよ。今は時化たといえばぶらぶら遊んでいるだけだからね。
- (16) 感嘆：尺度—程度の甚だしさ／事物—その動作・状態の異常性
- a. 大きな社になりますと、稲荷祭の神輿を出すところもありましたが、囃子屋台、踊り、茶番などは町内ごとにあつて、初午の騒々しさといえば、また格別でした。
 - b. その目立つことと言たらない。 (いずれも小西 2011)

以上の用法について、「といえ」 と 「といったら」 における分布の様相を示したものが次の表 1 である。

³ 小西は、コーパス調査によって〈問答〉〈表現属性〉として機能する「といったら」の例の存在を確認している(表 1 参照)が、小西が示す〈問答〉〈表現属性〉の用例は「という」 「といえ」を用いたものに限られている。

⁴ 〈同語反復〉とは、前項と後項に同じ語句(あるいはそれに相当する語句)が置かれる用法を指す。小西はこれを〈X トイエバ X〉と称するが、筆者によるコーパス調査から、この機能を「といったら」も有することが明らかとなった(3 節参照)ことから、本稿では名称を改めた。

表1 「といえば」「といったら」の用法分布

	動詞句	問答	想起	表現 属性	同語 反復	意味 確認	恒時 条件 ⁵	感嘆	計
トイエバ	79	309	439	66	76	0	6	2	977
トイッたら	91	5	9	22	0	1	0	16	144

（小西 2011 の表より抜粋）

表1のデータについて、前述の日本語記述文法研究会による指摘との整合性を見ると、「聞き手の発話中のことばを引用して提示し、その指示対象を確認したり尋ねたりする」場合(②-3)は小西の言う〈意味確認〉にあたると考えられるが、これについては日本語記述文法研究会による指摘通り、「といったら」の用例のみが確認されている。しかし、「といえば」が属さない「ったら」類が有する「人物や事柄を主題として感慨をこめて提示し、それに対する話し手の評価を述べる」用法にあたると考えられる〈感嘆〉については、「といえば」の実例が存在する結果となっている⁶。

2.3 佐藤雄一（2012）

小西による分類を踏襲し、より多くの実例を以って「といえば」の調査を行ったのが佐藤（2012）である。この研究の中で、佐藤は「といえば」と「といったら」の相違点について言及している。そこでは、「といえば」「といったら」それぞれの用例を比較した際、〈想起〉の例が占める割合が高いのは「といえば」の方であり、〈問答〉の例が占める割合が高いのは「といったら」の方であること、〈感嘆〉の例は「といったら」の用例にのみ見られたことが述べられている。このうち、〈問答〉と〈感嘆〉についての指摘は、小西が示すデータ（表1）と矛盾するものである。

2.4 問題の所在

以上、日本語記述文法研究会（2009）、小西（2011）、佐藤（2012）の指摘を概観した。ここで、これらの研究において述べられたことや、示されたデータから明らかになったことについて、小西による分類を採用してまとめるとつぎようになる。

⁵ 小西（2011）の表では〈恒常条件〉とされているが、これ以外の箇所では〈恒時条件〉と表記されていることから、本稿では後者の名称を採用する。

⁶ 小西は、〈意味確認〉の「といったら」、〈恒時条件〉〈感嘆〉の「といえば」の用例の一部、あるいは全部が不自然に感じるとし、その許容度に個人差があるという見解を示しているが、本稿ではこれを考慮しない。

- (17) 〈意味確認〉を有するのは「といたら」のみ（日本語記述文法研究会 2009、小西 2011）。
- (18) 〈感嘆〉を有するのは「といたら」のみとする見方（日本語記述文法研究会 2009）と、それを否定するデータ（小西 2011）がある。
- (19) 〈同語反復〉（恒時条件）を有するのは「といえば」のみ（小西 2011）。
- (20) 「といえば」は〈想起〉として用いられる頻度が「といたら」に比べて高い（小西 2011、佐藤 2012）。
- (21) 「といたら」は〈問答〉として用いられる頻度が「といえば」に比べて高いとする見方（佐藤 2012）と、それを否定するデータ（小西 2011）がある。

(17)～(19)は2形式における用法の有無に関する指摘であるが、これについては調査対象とした用例の数の少なさが影響している可能性を残す。また、(20)(21)は2形式が機能しうる用法の割合の高低に関する指摘であるが、本稿の目的は、“形式における用法の頻度”ではなく、“用法における使用形式の頻度”の実態と、その要因を探ることであり、これらの指摘からその点を明らかにすることはできない。そのため、先行研究が対象とした用例の数の少なさを考慮すると、改めてコーパス調査を行ったのち、各用法において2形式がどの程度の割合で出現するか観察する必要がある。以下では、3節において「といえば」「といたら」の用例を抽出したコーパス調査の結果から2形式の用法を計量的に分析し、4節において各用法における2形式の使用頻度差の要因について考察する。最後に、5節において本論をまとめ、残された課題について言及する。

3. 用法の計量的分析

BCCWJと「中納言」を用いて「といえば」と「といたら」の用例を収集したところ、これら2形式の用例が、それぞれ7397例と1865例集まった。本節では、これらを全量調査した結果明らかになった2形式の差異について述べる。

まず、筆者によるコーパス調査から得た用例を観察し、小西（2011）に做った分類を行った結果を示すと、次の表2ようになる。

表2 各用法の形式別使用頻度

	動詞句	問答	想起	表現 属性	同語 反復	意味 確認	恒時 条件	感嘆
トイエバ	551 33.0%	1909 94.6%	3854 92.1%	469 70.1%	592 96.1%	0 0.0%	16 84.2%	6 7.4%
トイッタラ	1119 67.0%	110 5.4%	330 7.9%	200 29.9%	24 3.9%	4 100.0%	3 15.8%	75 92.6%
計	1670	2019	4184	669	616	4	19	81

表1と表2を比較すると、各用法における使用形式の頻度差（動詞句）は「といえば」より「といたら」の方が用いられやすい、等）は、小西の調査結果と矛盾しない。しかし、各形式が有する用法の有無については顕著な差異がみとめられる点がある。まず、小西が0例とした「といたら」による〈同語反復〉が、筆者による調査では24例確認されていることである。具体的には次のような例がこれに該当する。

(22) 「忙しいといたら忙しいし、暇といたら暇です。〔筆者略〕

（『渡辺淳一全集』12）

同様に、「といたら」による〈恒時条件〉についても、小西の調査では0例であったのに対し、筆者の調査では3例収集された。

(23) 昔は、フライの衣を付けると言ったら、家族総動員だった。

（Yahoo!ブログ）

したがって、先行研究の指摘のうち、2形式が有する用法の有無に関する(17)～(19)のうち、(18)の日本語記述文法研究会による指摘と、(19)の指摘が否定される可言えよう⁷。つまり、用法の有無について指摘できる点は、次の(24)に限られるということになる。

(24) 〈意味確認〉を有するのは「といたら」のみ。

(= (17))

⁷ ただし、「といえば」による〈感嘆〉と「といたら」による〈恒時条件〉の用例は、確認できた数が少なく、許容度には個人差が生じることも考えられる。

次に、各用法における使用形式の頻度差に注目すると、次の点が指摘できる。

- (25) 〈問答〉〈想起〉〈表現属性〉〈同語反復〉〈恒時条件〉は「といえば」の方が高頻度で用いられる。
- (26) 〈動詞句〉〈感嘆〉は「といったら」の方が高頻度で用いられる。

また、〈同語反復〉は2形式がいずれも有する用法であるが、下位分類を行うことで次の点を指摘することができる。

- (27) 「といえば」「といったら」は、いずれも消極性含意の〈同語反復〉として機能しうるのに対し、積極性含意の〈同語反復〉として機能しうるのは「といったら」のみ。

本稿において「消極性含意の〈同語反復〉」とする用法の例は次の(28)(29)、「積極性含意の〈同語反復〉」とする用法の例は(30)のようなものである。

- (28) [筆者略] これは当然といえば当然です。 (= (13))
- (29) 「忙しいといったら忙しいし、暇といったら暇です。 [筆者略]」 (= (22))
- (30) 「あんた、しつこいね、ダメだと言ったらダメなんだ。 [筆者略]」
(高岸弘『ウソも芸術、イタリアン』)

さらに、〈動詞句〉についても、下位分類を行うことによって2形式における差異を示すことができるが、この点は「ば」と「たら」の特性の違いを見る4.2節において確認する。

4. 使用頻度差の要因

3節から明らかになった各用法における使用形式の頻度差を踏まえ、本節ではそのような差が生じる要因について考察する。それにあたり、まず4.1節において各用法の関係を分析し、次に4.2節において条件表現「ば」「たら」の特性を確認する。最後に、4.3節において2形式の使用頻度差の要因について考察する。

4.1 各用法の関係

まず、各用法の関係を分析し、それらが意味的に〈動詞句〉、つまり、動詞「言う」の発言行為としての意味を残す用法と密接に関連することを指摘する。

はじめに、〈問答〉と〈動詞句〉の関係を観察する。〈問答〉の特徴は、文全体で自問自答を行うというものである。この特徴を踏まえれば、これら2つの用法を判別することは容易であるが、そうして集まった〈問答〉の用例を観察すると、これらが〈動詞句〉によって表される内容と意味的に近似していることが見てとれる。というのも、〈動詞句〉の「といえは」「といったら」は、ある発言や表現を前項に置き、後項でそれに対する発言やその後の事態の展開が述べられるものであるが、この前項と後項の関係には、疑問に対する答えを提示する次のような例も含まれるのである。

- (31) これのできるんですかと言ったら、ちょっとこれでは足りないんだけどもここまでにするのも大変だったという話でございまして〔筆者略〕。

(国会会議録)

これは疑問を呈する人物とそれに回答する人物が異なる場合に成立するが、その疑問と回答がいずれも話者自身によって行われる場合、次のようになる。

- (31') これのできるのかと言ったら、ちょっとこれでは足りないけれども、ここまでにするのも大変だった。

(31') は前項に「言う」の動作主が生起しないことから、小西の分類基準で言えば、この「といったら」は〈問答〉にあたる。つまり、〈問答〉の「といえは」「といったら」によって構成される文は、疑問と回答から成る文のうち、それらがいずれも話者自身によって提示されるものであると言える。この点を踏まえると、疑問と回答を繋ぐ〈動詞句〉と〈問答〉の「といえは」「といったら」は、それを提示する人物の違いによって区別されると見ることができ、これらの機能は連続的なものと考えることができる。確かに、〈動詞句〉の場合と異なり、〈問答〉の「といえは」「といったら」は前項に「言う」の動作主が生起しないが、これは前項の疑問と後項の回答を提示する人物がいずれも話者自身であり、これを生起させる必要がないためであると言える。

〈動詞句〉との判別が容易であった〈問答〉に対し、〈想起〉〈表現属性〉〈同語反復〉は、〈動詞句〉と明確に判別することがやや困難な用例が少なくない。小西が示す特徴を踏まえて〈想起〉〈表現属性〉〈同語反復〉に分類したもののうち、そうした用例の一部を次に示す。

- (32) さて、四月と言えば桜の花をイメージしますが、実は卯の花が咲き乱れる月であることから卯月と言います。

(学校例話研究会編『学期・行事ごとの例話 60 選』)

- (33) 委員財政物資と言えばむずかしい感じですが、要するに税の対象として大事であるという意味だと思います。(国会会議録)

- (34) 「なぜ止めんか、止めるといったら止める」

(加来耕三『日本格闘技おもしろ史話』)

(32) では、「四月」という発言、あるいは表現から「桜の花」が想起されることが述べられているため、この「といえば」は〈想起〉である。また、(33) は「委員財政物資」という表現を「むずかしい」と評価しているため、この「といえば」は〈表現属性〉である。さらに、(34) は前項と後項で「止める」が繰り返されているため、この「といったら」は〈同語反復〉である。しかし、これらの用例における「といえば」「といったら」は、それを構成する「言う」が動詞としての意味を残しており、意味的に〈動詞句〉と近似しているものと思われる。特に、(34) は「言う」の動作主の生起も可能である。〈動詞句〉の「といえば」「といったら」は、その前項に「言う」の動作主の生起が可能であるとする岩男 (2012) の指摘を踏まえると、(34) の「といったら」は統語的にも〈動詞句〉と近似していると言える⁸。

- (34') 「なぜ止めんか、俺が止めるといったら止める」

こうした「といえば」「といったら」の用例の存在は、〈想起〉〈表現属性〉〈同語反復〉と〈動詞句〉が意味的に連続していることを示していると考えられる。

⁸ 岩男 (2012) では、「という」「といえば」「といったら」の用法が〈引用〉〈応答〉〈提題〉〈連想〉の 4 つに分類されている。「前項に「言う」の動作主の生起が可能」という指摘は、このうちの〈引用〉についてなされたものであるが、この用法は小西の言う〈動詞句〉と重なる。

一方、〈意味確認〉〈恒時条件〉については、〈動詞句〉との直接的な関係は明確でないが、これらは〈想起〉との関係がみとめられる。

- (35) 「角館の戸沢様の分家の門屋様と言ったら、角館から二里ほど北に行った
檜木内川沿いの門屋にある、あの城でっか」 (= (14))
- (36) 泳ぐといえば近くの川だった。 (市橋芳則『昭和夏休み大全』)

〈意味確認〉の「いったら」が用いられる (35) は、前項から想起された内容を確認するものである。つまり、後項が疑問形式であることを除けば、この「いったら」は〈想起〉と同じと言える。また、〈恒時条件〉の「といえば」が用いられる (36) は、“泳ぐときはいつも近くの川で泳いだ” という意味を表すが、これは「泳ぐ」という行為とその場所である「近くの川」が“一般性”や“代表性”といった観点で結ばれていると言える。この“一般性”や“代表性”は、〈想起〉として機能する形式が用いられた文に見られる特徴的な観点である。

- (37) 当時の日本人の履物といえば草履、草鞋、雪駄、下駄の類で、一般の庶民は西洋人のはく硬い革でつくった履物など見たこともなかった。
(山川暁『ニッポン靴物語』)

(37) は、「(当時の)日本人の履物」から「草履、草鞋、雪駄、下駄」がイメージされることを述べているため、この「といえば」は〈想起〉であるが、これは一般的な、あるいは代表的な「(当時の)日本人の履物」が「草履、草鞋、雪駄、下駄」であることを示している。つまり、〈意味確認〉〈恒時条件〉はいずれも〈想起〉と密接に関連し、間接的ではあるが、〈動詞句〉とも関連していると言える。

以上の分析から、〈問答〉〈想起〉〈表現属性〉〈同語反復〉〈意味確認〉〈恒時条件〉は、いずれも直接的、あるいは間接的に〈動詞句〉との意味的な関連がみとめられることが明らかとなった。この点を踏まえると、〈動詞句〉の「といえば」「いったら」の使用頻度差の要因が、それ以外の用法に見られる頻度差の要因でもある可能性が浮上する。この点について検討するにあたり、次節では〈動詞句〉の「といえば」「いったら」の差異に関わる条件表現の特性について、従来の指摘を確認し、同時にその指摘を踏まえた〈動詞句〉の用例の観察を行う。

4.2 「ば」と「たら」

条件表現については、これまで数多くの研究によってそれぞれの特性が分析されてきたが、ここでは主に藤城（2000）を参考にして「ば」と「たら」の特性について簡単にまとめる。

まず、「と」の特性から見ていく。藤城（2000）は「と」「ば」「たら」の基本的な意味を探る研究であるが、藤城はこのうちの「ば」、特に動作性述語に後接する「ば」の特性として、「後件を実現させるための条件を選んで前件に据える（p.32）」という点を指摘する。

- (38) a. 宿題が終われば遊んでいいよ。⁹
b. 宿題が終わったら遊んでいいよ。 (藤城 2000)

(38a)の場合、「遊ぶ」ことの条件として「宿題の終了」を挙げることを意味している。これに対し、(38b)ではその意味に加え、「宿題の終了」の次の段階として「遊ぶ」という段階が提示されていると解釈することも可能である。つまり、後者の解釈のみが生じ得る次の例文において、「ば」の使用は許容されなくなる。

- (39) 水戸に {着いたら／??着けば} 借楽園に行きたい。 (作例)
(40) 「〔筆者略〕ダウンジャケットを見せてくれ {と言ったら／??と言えば}、
やっこさん、急に青くなってさ」 (雨宮町子『私鉄沿線』)

さらに、藤城は、「ば」には文末表現のモダリティ制約があり、「依頼、命令、誘いなど、相手への働きかけを伴う表現（p.34）」が文末に生起することが制限されると言う。

- (41) 宿題が {終わったら／??終われば} 遊ぼうよ。 (作例)
(42) 「〔筆者略〕おれがよし {と言ったら／??と言えば} 読んだ。分かったな」 (永瀬隼介『永遠の答』)

また、多くの研究において、「ば」を用いた文では「必然的」「一般的」「恒常的」

⁹ (38a)は藤城が提示する(38b)を基にした例文である。

な事態が表されることが指摘されている。

- (43) 朱に {交われば／(?)交わったら} 赤くなる。¹⁰ (益岡 2002)
- (44) 「ひらの」のイチオシメニューはやっぱりお好み焼き！！ここでは、「そばライス」 {って言えば／(?)って言ったら} 通じるそうです♪
(Yahoo!ブログ)

この点について、藤城は、「後件を実現させる必要条件を選ぶということは、前件さえ実現すれば、当然後件も実現するという考えに繋がる (p.32)」と述べている。「ば」については、従来「条件結果の因果関係を客観的に把握 (森田 1967, p.33)」「恒常的・一般的 (山口 1969, p.150)」などの指摘がなされているが、藤城は、これらの意味が前述の特性に由来するという見解を示している。

一方、「たら」については、「ば」に比べて制約が弱いとしたうえで、「前件の事態成立時に視点を移動させ、そこで展開する事態を捉える (p.35)」という特性があることを指摘している。(39) (40) の場合に「たら」が用いられるのはこの特性に起因すると考えられる。

以上、先行研究で指摘された「ば」「たら」の特性を概観した。また、この特性が〈動詞句〉の「といえば」「といたら」の用例においても観察できることを確認した。4.1 節で述べた〈動詞句〉とそれ以外の用法との意味的な関連性、及び本節で示した〈動詞句〉の「といえば」「といたら」に影響する「ば」「たら」の特性を踏まえ、次節では、この特性が〈動詞句〉以外の用法に見られる 2 形式の使用頻度の差異の要因でもある可能性について検討する。

4.3 「といえば」「といたら」と「ば」「たら」

3 節の分析から明らかになった「といえば」と「といたら」の差異は次のようなものであった。

¹⁰ 益岡 (2002) では、(43) における「たら」の使用について、「口語的な表現としては一応許容される (p.81)」としたうえで、「このような文体上の制約を考慮すると、時間を超えて成り立つ一般的な因果関係を表す用法は、タラ形式の表現にとっては周辺的なものにすぎない (p.81)」と述べられている。

- (45) 〈意味確認〉を有するのは「といたら」のみ。 (= (17)(24))
- (46) 〈問答〉〈想起〉〈表現属性〉〈同語反復〉〈恒時条件〉は「といえば」の方が高頻度で用いられる。 (= (25))
- (47) 〈動詞句〉〈感嘆〉は「といたら」の方が高頻度で用いられる。 (= (26))
- (48) 「といえば」「といたら」は、いずれも消極性含意の〈同語反復〉として機能しうるのに対し、積極性含意の〈同語反復〉として機能しうるのは「といたら」のみ。 (= (27))

(47)の一部、つまり〈動詞句〉には「といたら」の方が用いられやすいことの要因は、藤城も述べている通り、「ば」に比べて「たら」の方がその形式に関わる制約が弱いことによると考えられる。以下、これ以外の点について見ていく。

まず、「たら」の「前件の事態成立時に視点を移動させ、そこで展開する事態を捉える」という機能に注目すると、(45)、つまり〈意味確認〉が「といたら」に限られる要因を説明することができる。〈意味確認〉は〈想起〉と意味的な近似が見られることを4.1節で述べたが、〈想起〉と異なるのは、相手の発言に出現した語句の意味を確認するために問い直す点である。つまり、〈意味確認〉の文では、後項の内容を述べる前に、前項に挙げた語句に一度視点を移動させる必要がある。前述の通り、この意識が反映されるのは「ば」ではなく「たら」である。したがって、これによって構成される「といたら」の方が〈意味確認〉に適合するのである。

次に、「ば」の「後件を実現させるための条件を選んで前件に据える」という特性に注目すると、(46)(48)の一部、つまり、〈問答〉と消極性含意の〈同語反復〉には「といえば」の方が用いられやすいことの要因を説明することができる。〈問答〉の文は、後項の内容を述べるために前項の疑問を生起させていると解釈することができる。次の例文を見られたい。

- (49) 糖尿病ですが、外から注射でインシュリンを与えれば、とりあえず急場はしのげます。そうやって糖尿病患者は急場しのぎをしています。それで体になんのマイナスも起きないかといえば、マイナスの影響はとてつもなく大きいのです。 (春山茂雄『脳内革命』)

(49)では、話者の主張は「(インシュリンによる体への)マイナスの影響はとてつとも

なく大きい」ということであり、これを述べるために「（インシュリンは）体になんのマイナスも起きないか」という疑問を設定しているのである。また、消極性含意の〈同語反復〉の場合、その文では、“後項の見方が成立する条件を整えた場合、そのように見ることが可能である”という意味が表される。

- (50) 庵は雑草に蔽われることなく庭師の手が入ってよく整っていたのが残念
といえば残念だが、それは仕方のないことだろう。 （『小説新潮』）

ここで「ば」について改めて確認すると、その特性は「後件を実現させるための条件を選んで前件に据える」というものである。消極性含意の〈同語反復〉に「といえば」の方が用いられやすいのは、「ば」のこの特性が影響しているのである。これらのことから、〈問答〉、及び消極性含意の〈同語反復〉において「といえば」の方が用いられやすいことも、「ば」の特性とこれら 2 用法の意味が馴染むことに起因すると言える。

次に、「ば」の「当然」「恒常的」「一般的」といった意味に注目すると、(46)の一部、つまり〈想起〉〈表現属性〉〈恒時条件〉には「といえば」の方が用いられやすいことの要因を説明することができる。4.1 節で述べた通り、〈想起〉〈表現属性〉〈恒時条件〉の文には“一般性”や“代表性”という観点が関与する。具体的に言えば、“後項の事物は前項の事物を代表する（前項の事物に関して一般的に知られる）もの”という意味を表す文になるのが、この 3 用法の特徴である。前述の通り、「ば」には前件と後件を「恒常的」「一般的」といった観点から結ぶ特性がある。つまり、〈想起〉〈表現属性〉〈恒時条件〉に「といえば」が用いられやすいのは、それを構成する「ば」の特性と、これらの用法によって文に表れる意味の適合度が「たら」に比べて高いからである。

次に、「ば」の後件の文末モダリティ制約、つまり「ば」の後件には依頼・命令、誘いなど、相手への働きかけを伴う表現が生起しない点に注目すると、(48)の一部、つまり積極性含意の〈同語反復〉が「いったら」に限られる要因を説明することができる。積極性含意の〈同語反復〉の例とは次のようなものであった。

- (51) 「なぜ止めんか、止めるといったら止める」 （= (34)）
(52) 「だめだと言ったらだめだ [筆者略]」 （船戸与一『炎流れる彼方』）

(51) (52) から分かるように、積極性含意の〈同語反復〉の後項には、命令や禁止を表す表現が生起する。これに「とといえば」が用いられないのは、この形式を構成する「ば」の特性、つまり、相手への働きかけを伴う表現が生起しないという制約が影響していると言える。

さらに、(47)の一部として、〈感嘆〉には「といったら」の方が用いられやすいことを挙げた。〈感嘆〉の場合、本稿では〈動詞句〉との意味的な関連性を見出すことはしていないが、この用法における「といえば」「といったら」の使用頻度の差についても、「ば」と「たら」の異なる特性の影響が見られる。「ば」「たら」では、形態的に前件に生起する事態が過去に起こったものである場合、基本的に「たら」の方が用いられることは明らかである。

- (53) 「おれが軽井沢にゆく {と言ったら／??といえば)、弓子のやつ、私もゆくと言い出してさ、弱ったよ。〔筆者略〕」 (辻邦生『椎の木のほもり』)

〈感嘆〉とは、ある事柄の程度や状態について、話者の主観的な感情を表出させるものであるが、その感情はある事柄を経験して初めて生じるものである。つまり、基本的にその事柄は過去に生起しているのである。「といえば」が〈感嘆〉の用法となりにくいのは、これに前接すべき事柄、つまり感情の生起を促す事柄が、基本的には過去の出来事であることによると考えられる。

以上の分析により、(45)～(48)が、いずれも「ば」と「たら」の特性から説明可能であることが明らかとなった。したがって、各用法における「といえば」「といったら」の使用頻度の差異は、これらを構成する条件表現「ば」「たら」の特性に起因すると指摘することができるのである。

5. おわりに

本稿では、「といえば」「といったら」の用例を計量的に分析し、各用法における2形式の使用頻度の差異を観察した。また、これらが有する用法の多くが〈動詞句〉と意味的に関連することを指摘したうえで、各用法における使用頻度の差異が、これらの形式を構成する条件表現「ば」「たら」の特性に起因するものであることを指摘した。

しかし、本稿では、「といえば」「といったら」がいかにして複数の用法を獲得し

ているのか、という点については検討していない。今後、これらの形式と同様に、動詞「言う」の条件形から成る「という」と「といえば」を含めた分析も行い、その点を明らかにすることが求められる。また、岩男（2012）などが注目するこれらの特殊な機能、つまり、典型的には「は」が果たすとされる提題の機能についても触れなかった。「といえば」「といたら」の提題機能が観察されるのは、次のような場合である。

- (54) 人の生涯で一番の悲しみ {といたら／といえば／は}、最愛の人との永遠の別れではないでしょうか。
(Yahoo!ブログ)

この点については大塚（2016）で分析を試みたが、条件表現と提題機能の関連性について述べる有田（1992）や高梨（2003）などを踏まえ、さらに詳細な分析を行う余地を残している。いずれも今後の課題である。

参考文献

- 有田節子（1992）「日本語における条件と主題の融和について—談話における setting 機能—」『KLS』12, 関西言語学会, pp.110-119
- 岩男考哲（2012）「「と言う」の条件形を用いた文の広がり」『日本語文法』12-2, pp.179-195
- 大塚貴史（2016）「「といたら」の文法化の段階と「提題」に関する考察」第 147 回関東日本語談話会（学習院女子大学）
- 小西いずみ（2011）「複合辞「というと」「といえば」「といたら」の用法の異同に関する計量的考察」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ予稿集』pp.41-48
- 佐藤雄一（2012）「「といえば」の主題提示用法」『共立国際研究』29, 共立女子学園共立女子大学国際学部, pp.33-51
- 高梨信乃（2003）「遠そうに近い条件と理由、条件と主題」『月刊言語』32-3, 大修館書店, pp.47-53
- 陳新妍（2010）「「トイエバ」文の意味と談話における機能」『日本語学会 2010 年

度秋季大会予稿集』 pp.71-78

日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法 5 第 9 部とりたて 第 10 部主題』
くろしお出版

藤城浩子 (2000) 「ト、バ、タラ —基本的な意味からの用法検証—」 『三重大学留学生センター紀要』 2, 三重大学留学生センター, pp.25-38

藤田保幸 (1987) 「「～トイウト」「～トイエバ」と「～トイッテ」「～トイッテモ」
—複合辞に関する覚書—」 『国語国文学報』 44, 愛知教育大学国語国
文学研究室, pp.141-152

益岡隆志 (2002) 「第 2 章 複文各論」 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行
則 『日本語の文法 4 複文と談話』 岩波書店, pp.63-116

森田良行 (1967) 「条件の言い方」 『講座日本語教育』 3, 早稲田大学語学教育研究所,
pp.27-43

山口堯二 (1969) 「現代語の仮定条件法 —「ば」「と」「たら」「なら」について—」
『月刊文法』 2-2, 明治書院, pp.148-156

おおつか たかし／人文社会科学研究所
(2016年10月15日受理)